

41339

教科書文庫

4

210

32-1910

25000  
30532

1910

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科  
32-  
25000

# 小學日本歷止史

新制高等小學校  
第三學年用

文部省

教科書文庫  
4  
210  
32-1910  
2500030532



登録番号  
30532  
分 375.9  
類 M

# 小學日本歴史

新制高等小學校  
第三學年用

文部省

広島大学図書  
2500030532



目録

第一 東西兩洋の接近……………一

第二 西洋人の渡來と我が鎖國政策……………四

第三 露國の東方經略と我が外國船擊攘の令……………十一

第四 開港の顛末……………十四

第五 江戸幕府の衰運……………十九

第六 尊王攘夷論の優勢と長州征伐の顛末……………二十四

第七 王政の復古と維新戰亂の鎮定……………二十九

第八 内治の整頓……………三十六

第九 内治の整頓(續き)……………四一

第十 外交の進歩……………四四

第十一 立憲政體の確立……………五十

第十二 朝鮮の扶植と明治二十七八年戰役……………五十四

第十三 朝鮮の扶植と明治二十七八年戰役(續き)……………五八

第十四 法典編纂及び條約改正……………六十二

第十五 明治三十三年清國事變と日英同盟……………六六

第十六 明治三十七八年戰役……………七

第十七 明治三十七八年戰役(續き)及び戰後の經營……………七六

第十八 人文の發達と軍備の整頓……………八三

第十九 總括……………八十六

附録 年表……………

小學日本歴史

新制高等小學校  
第三學年用

第一 東西兩洋の接近

地理上の發見

東西兩洋の諸國は其の地互に遠く隔たりたれば、交通の不便なりし古代に於ては、豪傑の遠征商人の往來等の機會によりて、彼此僅に相知るに過ぎざりき。就中大日本帝國は亞細亞大陸の東方海中にありて、西洋諸國との交通なかりしかば、西洋人は我が國の存在をすら知らざりき。然るに紀元一千九百年代の初頃建治元年西曆一千二百七十五年伊太利人マルコ・ポーロと云ふもの、陸路支那に來りて元主忽必烈フビライに仕へ、歸國の後、我が國の大いに黄金及び珍奇なる産物に富めることを傳へたり。是れ我が國が西洋人に知られたる始なり。其の後二

葡萄牙人の  
東方經略

百餘年を経て、我が戰國時代の初頃に至り、西洋人は航海術の進歩につれて次第に遠隔の地に航行し、世界の形勢漸く一變するの氣運に向へり。斯くて紀元二千百五十二年明應元年西曆一千四百九十二年伊太利人コロンブスは大西洋を西に航して我が國に來らんとせし途中にて偶然亞米利加洲を發見し、其の後五年、葡萄牙人バスコ、ダ、ガマは亞弗利加洲の南端を回航し、其の翌年印度に到着したり。是より後、西洋人の亞細亞、亞米利加の諸洲に往來するもの次第に多くして、世界各國互に交通するの端緒ここに開けたり。

さて西洋諸國人の中、始めて東洋の經略に着手せるものを葡萄牙人となす。其の航路を印度洋に開くや、先づ印度、波斯等と通商し、又其の土地を侵略して沿海の要所に數多の貿

西班牙人の  
東方經略

東洋に於ける  
和蘭人の  
優勢

易場を設けたり。印度の西岸なるゴアは是等貿易場の中心として次第に繁盛に赴き、諸方の産物は、大抵此の地を経て葡萄牙に送られたり。

西班牙人も、亞米利加洲の發見せられし後、早く其の經略に従事したりしが、又太平洋を経て東洋に渡來し、紀元二千二百年代の初頃永祿八年西曆一千五百六十五年フリピン群島を取り、やがて政廳を呂宋島のマニラに建てたり。

次いで紀元二千二百年代の中頃に至り、和蘭、英吉利の兩國は、各、遠征船隊を東洋に派遣して通商の利を求めんとせり。中にも和蘭人は主として馬來群島を經略し、ジャバ島にバタビヤ府を建てて東洋の根據地と定め、英吉利人、葡萄牙人と競争して、一時東洋に優勝の地位を占めたり。

印度に於ける英佛兩國の經略

英吉利人の東洋に於ける事業は其の初和蘭人の爲に壓倒せられ、馬來群島にありては、概して失敗に終りたりき。されども印度方面に於ては着着として成功し、漸次其の海岸にマドラス、ボンベイ、カルカッタ等を開き、以て根據とせり。佛蘭西人も亦英吉利人につぎて印度に注目し、漸次其の經略を進めたり。かくの如くにして、西洋諸國は次第に其の勢力を東洋に擴張し、遂に我が國とも接觸するに至れり。

### 第二 西洋人の渡來と我が鎖國政策

始めて東洋貿易に従事せし葡萄牙人は又實に我が國に渡來せる西洋人中の最初の者なりき。紀元二千二百年代の初、天文十二年西曆一千五百四十二年葡萄牙の商船一隻大隅の種子島に來

葡西兩國人の渡來

基督教の傳來

れり。蓋し葡萄牙人が東洋貿易の範圍を擴むるに隨ひて、其の商船は屢、支那、印度の海上を往來せしが、時としては颶風に遭ひ漂流することありて、偶然我が國にも來りしなり。此の時始めて小銃を傳ふ。折しも戰國時代なりしかば、此の有力なる武器は大いに世に珍重せられたり。是れ我が國と西洋諸國との交通の發端なりとす。葡萄牙人は其の後豊後の府内ふない、今の薩摩の鹿兒島等にも來りしが、媽港まかを得るに及びて之を支那海に於ける根據地とし、我が國にては肥前の平戸を互市場として、一時盛に通商せり。西班牙人も亦屢、呂宋等より渡來して貿易を營みき。邦人は是等の人人を南蠻人と呼び、其の商船を南蠻船と稱したり。葡萄牙船の往來始りし後、幾ばくもなく天文十八年、西曆一千五百四十九年基

邦人の海外  
渡航

督教の宣教師西班牙人フランソア、ザビエーと云ふもの、鹿  
兒島に來りて布教せり。是れ基督教の我が國に傳來せし始  
にして、當時世に之を切支丹宗と呼びたり。ザビエーは尙、平  
戸・山口・京都府内等の各地に赴きて布教に従事し、其の我が  
國を去りたる後には、他の宣教師代り來りて、傳道に勉めた  
り。されば切支丹宗は程なく大いに諸國に弘まり、織田信長  
も之が布教を保護し、京都・安土等に會堂の設立を許すに至  
れり。  
是より先、室町幕府は使節を派遣して明と貿易したりしが、  
諸大名の中にも、周防の大内氏の如きは亦自ら明と通商し、  
對馬の宗氏は常に朝鮮と貿易を營みたり。其の外、邦人の隨  
意に明朝鮮等に渡航して貿易をなすもの少からず、中には

暹羅

支那人英吉  
利人和蘭人

其の沿海の地を侵し商船を掠めたるものもありき。倭寇即  
ち是なり。切支丹宗の漸く行はるるに及び、之を信仰せる九  
州諸大名の中、大友・有馬・大村の三家は相謀りて紀元二千二  
百年代の中頃天正十年、西曆一  
千五百八十二年遠く使節を羅馬法王の許に遣  
はすに至れり。豊臣秀吉の世を経、徳川家康の頃に至りては、  
幕府より渡航免許の朱印狀を得て貿易を營むもの益増加  
し、其の範圍は、近くは媽港・暹羅・安南・臺灣・呂宋・ジャバ等の諸地  
方より、遠くは墨西哥にまでも及び、是等の商船を御朱印  
船と云ふ。斯くて邦人の出でて外國に居住するものも漸く  
多く、呂宋・暹羅等には日本町の建設を見るに至り、邦人の海  
外に活動したりし有様は歴歴として徴すべきものあり。  
斯く邦人の海外貿易に従事するもの其の數を加ふると共

との貿易

に、外國人の我が國に渡來して貿易を營むもの亦漸く多し。中にも支那とは彼我の往來早くより開けたりしかば、紀元二千二百年代の初頃永祿元龜の頃に至りては、明の商船の肥前薩摩の諸港に來りて通商するもの益増加せり。又和蘭の商船は紀元二千二百六十九年慶長十四年、西曆一千六百九年始めて徳川家康より通商を許され、爾來平戸を互市場として、毎年バタバヤより來航せり。紀元二千二百七十三年慶長十八年、西曆一千六百十三年に至り、英吉利船も亦平戸に渡來して、同じく家康より通商の免許を得たり。斯くて和蘭英吉利の兩國人は互に激しく貿易上の利益を争ひたりしが、和蘭人遂に勝を制し英吉利人は我が國を引拂ふに至れり。

鎖國政策

海外との交通漸く盛なるに隨ひ、切支丹宗は益弘まれり。然

禍根

るに其の宗徒の中には或は神佛の禮拜を廢し、或は社寺を毀つが如き、我が國の習慣に反せるのみならず、時には君國をも顧みざるが如き舉動をなす者あるに至りしかば、秀吉は其の國家に害あらんことを慮りて、斷然布教を禁止せり。家康も亦此の方針を繼續して禁令を發し、宣教師の渡來を拒みて、禍根を絶たんとせしが、尙未だ十分に其の効を奏する能はざりき。たまたま和蘭人貿易の利を専らにせんとし、幕府に密告し、葡萄牙人は宗教の手段によりて國を奪はんとするものなりと云へり。ここに於て幕府は愈、警戒を嚴にして宣教師を逐ひ、紀元二千二百年代の末寛永十年より十三年に至り、三代將軍徳川家光遂に重ねて切支丹宗嚴禁の令を發し、且邦人の海外に渡航するを禁じ、南蠻人の胤を求めて悉く

島原の亂

信仰

猖獗

之を媽港に放逐せり。  
 かくの如く、幕府は切支丹宗禁制の必要より鎖國の政策を執るに至りしが、九州地方の宗徒は尙其の信仰を棄てず、紀元二千二百九十七年寛永十の冬、遂に肥前の島原半島なる原の古城に據りて亂を起せり。幕府乃ち兵を出して之を討たしめしが、其の勢猖獗にして容易に鎮定すること能はず、更に大いに兵を増し、攻圍翌年に亙りて、始めて之を平ぐるを得たり。其の結果、切支丹宗の禁令は益、嚴重となり、通商のみを事とする和蘭人、支那人には長崎の一區を限りて通商居住を許したれども、所謂南蠻船の渡來は是より全く絶え果てたり。

露國の西比利亞經略

### 第三 露國の東方經略と我が外國船擊攘の令

露西亞は我が室町幕府時代の末頃に興りたる歐羅巴の新興國にして、年を逐ひて其の領土を擴め、紀元二千二百年代の初永祿元年、西曆一千五百五十八年より西比利亞の經略に着手せり。此の地方は氣候寒冷にして人烟稀少の處なれば、露西亞人は甚だしき抵抗を受くることなくして、漸次地を東方に拓き、其の探檢隊は紀元二千三百年代の初寛永二十年、西曆一千六百四十三年頃既に黒龍江の上流に達せり。ここに於て露清兩國の境界次第に明かならず、相互の兵士衝突せしことありしかば、兩國政府は國境を議定し、次いで兩國間に互市の約を結べり。斯かる間にも、露西亞は益、東方經略の歩を進めたりしが、紀元二千三百

露國の南下

年代の中頃ペートル大帝の出づるに及び、遂に勘察加半島を略し、益、太平洋の沿岸に其の勢力を張らんとせり。

露西亞の勘察加半島の領有は即ち其の千島經略の發端なりき。是より露西亞人は次第に我が北邊に近づき、紀元二千四百年代の中頃安永七年西曆一千七百七十八年には、既に我が國後島に來れり。されど當時邦人は未だ北邊の事情を審にせず、之に對して深く注意するものあらざりき。其の後十餘年を経て、露西亞使を遣はして通商を求むるに及び、幕府は始めて北邊經營の重要なることを知りて、其の請を拒み、更に近藤重藏、間宮林藏等をして、邊境を巡視せしめたり。此の前後にも露西亞人の屢、擇捉樺太等を侵せるありて、幕府は益、北門の防備に苦心するに至れり。

英國船の暴行

海防論と外國船擊攘の令

露西亞人の屢、我が北邊に來寇せし頃、英吉利の大船突然長崎港に入り來りて暴行を恣にせり。紀元二千四百六十八年文化五年是より後も、英吉利船は屢、近海に來り、時に或は上陸して暴行せしことあり、邦人の外人を嫌惡するの情は一層甚だしくなれり。

是より先、外國船の我が近海に出没すること漸く頻繁となるや、識者の中には夙に海防の急を論ずるものあり、林子平の如きは其の首唱者なりき。露西亞人の來寇、英吉利船の暴行などありし後は、此の論益、勢力を得たり。斯くて紀元二千四百八十五年文政八年幕府は遂に意を決して我が海岸に近く外國船は一切之を打拂ふべしと令し、又我が商船・漁船等の海上に於て外國船に接近するを禁じ、以て愈、鎖國政策を勵行せり。

開港論

### 第四 開港の顛末

八代將軍徳川吉宗禁書の令を緩め蘭學を奨勵せしより以來、洋書を読みて外國の事情に通ぜる學者相踵いで出でたり。されば外國船擊攘の令の出づるに及び、是等の學者の中には其の非を論ずるもの少からざりしが、たまたま紀元二千四百九十八年天保九年英吉利國の軍艦我が漂民を送り來らんとする風聞あり、幕府は前令の趣意によりて、之をも打拂はんとせり。蘭學者高野長英・渡邊登山等は之を以て外國の形勢を察せざる無謀の企なりとし、鎖國攘夷の到底行ふべからざるを痛論して罪せられたり。されども此の後開港の論は却つて益勢を得たり。

外國船擊攘の令を緩む

此の時に當り、清國にては阿片輸入の事につきて英吉利國と戦ひしが、利あらず、遂に上海・廣東等の五港を開き、且香港を割讓し、償金を出して和を結び、清國戰敗の報早く我が國に達せしを以て、幕府も之に鑑みるところあり、紀元二千五百二年天保十三年に至りて外國船擊攘の令を緩め、漂着の外國船には薪水・食糧を給して歸國せしむることとせり。是より後、外國船の我が近海に來航するもの益増加し、其の通商を請ふこと繁くなりしが、幕府は常に之を拒みて、愈意を海岸の警備に用ひたり。

ペルリ親條の締結

紀元二千五百十三年嘉永六年六月亞米利加合衆國の使節ペルリ船艦四隻を率ゐ、浦賀に來りて和親を求めたり。此の時邦人は見慣れぬ大船の突然入り來れるに驚き、事の成行を慮

りて、騒動一方ならず。幕府は俄に諸大名に令して海岸を警衛せしめ、又吏員を遣はして其の國書を受け、明年返答すべき旨を傳へて、使節を歸らしめたり。斯くて幕府は此の國家の大事に關し獨斷にて之を決するを危み、朝廷に奏聞し、又諸大名の意見をも徴したり。然るに衆議區區にして和戰の議未だ決せざるに、翌年安政元年正月ペルリは七隻の船艦を率ゐて再び浦賀に來り、國書の返答を求む。ここに於て幕府は已むを得ず全權委員を遣はしてペルリと談判せしめ、遂に始めて和親條約を結びて、亞米利加船の下田・函館に渡來するを許し、必要なる薪水食糧等を給することを約せり。されど通商は尙未だ之を許さざりき。此の後幕府は英吉利及び和蘭ともほほ同様の條約を締結したり。是より先、露西亞の

使節も亦ペルリの始めて渡來せし翌月嘉永六年七月長崎に來りて通商を求めしかば、幕府は其の事の重大にして急に決定し難き旨を諭して歸らしめたり。翌年安政元年十月其の再び下田に來りし時には、既に米・英の兩國と條約を結びし後なりしかば、幕府は十二月に至り露西亞國とも亦和親條約を締結したり。

ハルリスの  
渡來及び將  
軍謁見

通商條約の  
締結

紀元二千五百十六年安政三年亞米利加合衆國の總領事ハルリス曩に結びたりし和親條約に基づきて下田に來り、やがて將軍に謁見せんことを請へり。幕府は容易に此の要求を容るるを得ず、又斷然之を拒絶すること能はず、翌年十月に至り遂に之を引見せり。此の時ハルリスは時勢を論じて我が鎖國主義を執るの不

利を説き、通商を開かんことを求めたり。幕府は其の請を拒むこと能はず、談判の末遂に通商條約を締結し、一定の年月を経たる後には、神奈川横濱、兵庫神戸、長崎、函館、新潟の五港を開くべきことを約し、老中堀田正睦初名正篤を上京せしめて、勅許を仰がしめたり。是より先、紀元二千五百六年弘化三年孝明天皇踐祚あり。天皇英明にましまして、夙に御心を國事に留めさせ給ひしが、當時朝廷には攘夷の論盛なりしを以て、容易に幕府の請を許し給はざりき。然るに此の頃、英吉利、佛蘭西の兩國は事を以て清國との交戦中なりしが、其の戦勝の勢を以て、我が國にも通商を強請せんとするの風説あり、ハルリス之に乗じて條約の調印を促せしかば、幕府の大老井伊直弼、事情の甚だ切迫せるを察し、紀元二千五百十八年安政五年六

月遂に勅許を待たずして之を決行せり。ここに於て大老を非難するの聲大いに起れり。幕府は次いで蘭、露、英、佛の諸國とも通商條約を締結し、翌年安政六年六月より、先づ長崎、函館、神奈川横濱の三港を開きて、内外人の互に貿易するを許したり。斯くて紀元二千五百二十年萬延元年には、幕府の吏員亞米利加合衆國に渡航して國民の知見を廣むるの端を開き、後、幕府を始め、薩州、長州、佐賀等の諸大藩よりも留學生を英、米諸國に派遣するに至れり。

### 第五 江戸幕府の衰運

幕府は八代將軍吉宗の出づるに及びて一時大いに興りしが、久しからずして、庶政復弛み、寛政紀元二千四百の松平定信

幕府の衰運

天保紀元二千四百の末頃、水野忠邦の改革も、永く其の効果を保つ能はず。旗本の士は奢侈に流れて元氣漸く衰へ、政治軍備等皆振はず、加ふるに一方には尊王論の勃興するあり、他方には攘夷説の勢を得るあり、幕府の施政は次第に困難となりたり。

尊王論の勃興

從來幕府の政治は總べて專斷を以て事を處し、上は朝廷より下は諸大名に至るまで、嘗て之に干涉參與するを許さず、其の威力の盛なるに任せて、朝臣を抑壓せしこともありき。殊に當時の朝廷の御料は院・宮・門跡及び堂上諸家の所領等を合せ、僅に十餘萬石にして、一の中諸侯の收入に過ぎざる程なりき。然るに文教大いに興り、國史・古典の研究の隆盛となるに隨ひ、深く皇室の尊嚴を思ひて勤王の義を説く之士

將軍繼嗣の議

漸く現れ、幕府の所爲を憤慨して王政の復古を唱ふるものさへ起りき。ここに於て幕府も外交の事に關しては特に勅裁を仰ぐの己むを得ざるに至れるなり。此の際、將軍徳川家定子なくして繼嗣を定むるの必要あり。尾州藩主徳川慶勝よしかつ、越前藩主松平慶永よしなが、薩州藩主島津齊彬なりあきら等は、年長にして且賢明の聞えある徳川慶喜よしのぶ一家一橋に望を屬し、之を立てて難局に當らしめんとせり。慶喜は前水戸藩主徳川齊昭の子なり。然るに大老井伊直弼は、紀州藩主徳川慶福とみが家定と血縁相近しとの理由により、衆議を排して之を迎へたり。慶福時に年十三、是れ即ち十四代將軍徳川家茂いへもちなり。ここに於て其の處置を怒れる反對者の聲は外交上の非難と相合して、海内鼎の沸くが如くになりき。直弼乃ち反對

安政の大獄

者たる徳川慶勝、徳川齊昭、松平慶永等を蟄居或は謹慎せしめて、之が鎮定を圖れり。

京都にては、幕府が勅許を請ひ奉りながら之を待たずして條約に調印せしを憤り、其の專斷を咎むるもの多し。朝廷乃ち幕府に勅して、三家尾張・紀伊・水戸大老の中上京して事情を陳ずべきことを命じ給ひしが、幕府は之を辭し、老中間部詮勝まなべあきかつを上京せしめて、條約調印の已むを得ざりし所以を奏聞せしめたり。此の時直弼は勤王の説を唱へ、又は家茂の擁立を非として幕府の所爲に反對するもの等を嚴密に探索し、吉田寅次郎松陰、橋本左内、安島帶刀あじまたてはき等を始め、數多の志士を捕へて、之を死若しくは流に處し、或は之を追放せり。其の連累は延いて親王、公卿諸大名にも及びき。世に之を安政の大獄と云

櫻田の變

ふ。

條約の調印と云ひ、繼嗣の擁立と云ひ、井伊直弼の處置世の反對を受くること多く、又其の反對者を罪すること嚴重なりしかば、直弼は紀元二千五百二十年萬延元年三月三日上巳の節登城の際、水戸藩の浪士等十八人の爲に、櫻田門外に於て殺害せられたり。

和宮の降嫁

直弼の死後は、老中安藤信正、久世廣周ひろちか主として事に當りしが、將軍家茂の爲に皇妹親子ちかこ内親王かすのの降嫁を得て、以て公武の合體を表せんと請ひ、因りて十年以内を期し、必ず攘夷すべしと誓ひしかば、朝廷已むを得ずして之を許し給へり。斯くて櫻田事變の翌年文久元年内親王東下し給ひしが、志士之を聞きて益憤慨し、遂に國に歸りて各、其の藩主を説き、翌年

を期して大舉勤王せんとの議を決するものあるに至れり。而して信正は翌年文久二年正月坂下門外に於て浪士に襲撃せられ傷を被れり。

### 第六 尊王攘夷論の優勢と長州征伐の顛末

幕政の改革

紀元二千五百二十二年文久二年四月、島津久光兵を率ゐて入京す。久光は齊彬の弟にして、薩州藩主忠義ただよしの後見たりき。久光夙に尊王の大義を唱へ、志士の間まに重きをなしたりしが、其の入京するに及びて、大いに上下の間に周旋するところあり。翌月朝廷大原重徳しげとみを勅使とし、島津久光を之が護衛として江戸に遣はし、將軍の上京を促し、且幕政を改革すべきの聖旨を傳へしめ給へり。幕府乃ち將軍の上京を來春に期し、

攘夷の方針一定

徳川慶喜を後見とし、松平慶永を總裁職に任じて、朝旨を遵奉せんことを力めたり。次いで朝廷は又三條實美さねよし・姉小路公知さとしを勅使として江戸に下し、攘夷の決定を促さしめ給ひき。鎌倉時代よりこのかた大小の國政總べて幕府の爲すがまゝに任せ給ふこと七百年の久しきに及びたりしが、ここに至りて形勢一轉し、事の重大なるものものにありては、朝廷より進みて幕府に命令し給ふこととなりしなり。ここに於て將軍家茂は翌年文久三年三月朝旨を奉じて上京す。此の月天皇賀茂に行幸あり、公卿並びに在京の諸侯多く之に従ひ、將軍亦供奉に列し、天下益、天皇の尊きを見る。時に尊王討幕の思想益、烈しきを加へ、等持院なる足利尊氏たかあき・義詮よしかん・義満よしみちの木像の首を三條河原に梟し、討幕の意を諷するものす。

一 外艦砲撃の

其の二

らあり。又朝廷は家茂に逼りて攘夷の實行を促し給ひしかば、家茂已むを得ずして勅を奉じ、此の年五月十日を以て愈其の實行の期と定めたり。

攘夷の方針既に一定せしかば、かねて其の主張者たりし長州藩は期日に至り率先して下關海峽を通過する亞米利加の商船を砲撃し、次いで佛蘭西・英吉利・和蘭及び亞米利加の聯合艦隊と數回砲火を交へたり。

長州藩の攘夷實行と相前後して、薩州藩も亦英吉利の軍艦と鹿兒島灣に戦ひて之を撃退せり。初め島津久光、勅使を護衛して江戸に下り、其の歸途武藏の生麥村なまむぎを過ぐるや、久光の従士英吉利士官の其の行列を横ぎれるを怒り、之を殺害せしことあり。ここに於て英吉利政府は軍艦を派遣して償

蛤御門の變

金を幕府に要求し、更に轉じて鹿兒島に到らしめしが、薩州藩は其の要求に應ぜず、遂に砲火を交ふるに至りしなり。

是等の交戦によりて、敵の武器其の他の進歩の状を知り、攘夷の到底實行すべからざるを悟るもの少からざりしが、一部部の人士は之が爲に却つて攘夷の志氣を鼓舞せられ、遂には長州其の他數藩の志士の間には親征の議さへ起り、朝臣の中にも之に應ずる者あるに至れり。蓋し親征に乗じて一舉して幕府をも倒さんとの計畫ありしなり。然るに薩州藩士は公武合體かたもりの説を執りて之に反對し、京都守護職なる會津藩主松平容保かたもりと相謀り、中川宮後の久邇宮によりて親征の不可を奏上せしかば、朝廷乃ち親征を延引し、又長州藩士の在京を禁ぜしめ給へり。ここに於て長州藩と議を一にした

りし中納言三條實美以下の七人は長州に奔り、又攘夷論者の中には、大和但馬等に兵を擧げたるものもありき。翌年元治長州藩士は朝廷の御處置につき歎願するところあらんとし、多數相率ゐて入京せんとす。會津・薩州等の兵之を防ぎて兩軍遂に戦を交へ、長軍の彈丸飛んで宮闕に達するに至れり。世に之を蛤御門の變と云ふ。

長州征伐

ここに於て幕府は奏請して長州の罪を鳴らし、前尾州藩主徳川慶勝を總督とし、諸藩の兵を發して之を討たしむ。然るに、長州藩主毛利敬親初名は恭順を表し、其の罪を謝せしを以て、慶勝等は未だ其の國境に入るに至らずして軍を還せり。されども長州にては恭順を喜ばず、奮起して幕軍に反抗せんとするもの多し。幕府も亦慶勝等の處置を以て寛に過

ぎたりとなし、紀元二千五百二十五年慶應元年更に再征の軍を發して、紀州藩主徳川茂承もつぐを總督に任じ、將軍家茂亦自ら大阪に到れり。斯くて翌年正月敬親父子を蟄居せしめ、其の封地十萬石を削らんとせしに、長州之に服せず。幕府は乃ち愈征長の軍を進めて其の國境に逼りしが、會、薩長の連合既に成りたりしかば、薩州は斷然出兵の命に應ぜず。諸藩にも亦幕命に従はざるもの多し。しかのみならず幕軍各所の戦に連敗して、其の實力なきこと世間に暴露し、幕府の威望頓に地に墜ちたり。

第七 王政の復古と維新戦亂の鎮定

長州再征の軍利あらざるに當り、將軍家茂病みて大阪に薨

徳川慶喜將軍となる

今上天皇踐  
祚

大政奉還

ぜしかば慶應二年七月德川慶喜入りて幕政を統べ、やがて將  
軍職に補せられたり。慶應二年十二月  
此の年十二月二十五日太陽曆にては翌年一月三十日孝明天皇崩御あり、翌  
年慶應三年正月九日今上天皇踐祚し給ふ。時に御年十六。國喪の  
故を以て勅して征長の軍を罷めしめ給へり。  
此の時薩州の西郷隆盛大久保利通、長州の木戸孝允等は三  
條實美、岩倉具視等と氣脈を通じ、幕府を倒して王政を復古  
せんとするの密議を進めたり。其の他の諸藩には或は勤王  
を唱ふるあり、或は佐幕に傾くあり、又一藩の中にて兩派に  
分るるもありて、互に相敵視し、天下の形勢甚だ穩ならざり  
き。前土州藩主山内豊信とよしげ堂之を見て、禍亂の大いに至らんこ  
とを憂へ、其の未だ發せざるに先だち、幕府をして大政を返

王政の復古

上せしめんとし、家臣後藤象二郎等をして之を慶喜に勧め  
しむ。慶喜も亦時勢の既に變じて幕政の永く維持し難きを  
悟りたりしかば、英斷を以て其の勸に従ひ、紀元二千五百二  
十七年慶應三年十月十四日上表して大政奉還を請ひ、政權一途  
に出でて海外萬國に對峙するに至らんことを奏し、次いで  
將軍職をも辭退せり。  
慶喜の大政奉還を請ふや、朝廷直ちに其の請を許し給ひ、又  
國政の方針を議定せんが爲に、翌十一月を期して、諸侯の上  
京を命じ給ふ。前越前藩主松平慶永、前土州藩主山内豊信、前  
佐賀藩主鍋島齊正なりまさ、前宇和島藩主伊達宗城むねなり及び薩州の島  
津久光も亦特に上京の命を蒙れり。斯くて十二月八日曩に  
長州に奔りたりし三條實美以下七人、並びに毛利敬親等の

官位を復して、其の入京を許し、翌九日愈、王政復古の大號令を發し給へり。家康の幕府を開きしより徳川氏將軍職に在ること總べて十五代、凡そ二百六十年、源頼朝が武家政治を創めしよりは凡そ六百八十年にして、政權朝廷に復歸せり。世に之を王政復古と云ふ。此の時攝政關白征夷大將軍等の職を廢し、新に總裁・議定・參與の三職を置き給へり。維新の政ここに始る。

鳥羽伏見の役

王政既に古に復り、公卿並びに勤王の諸侯等、拔擢せられて維新の政治に與りたれども、前將軍慶喜は尙舊幕臣及び會津・桑名等の兵と共に二條城に在り、諸侯の中にも、幕府の恩誼を思ひて、心を之に寄するもの多く、其の勢頗る盛なりき。朝廷乃ち慶喜に内大臣の官を辭し領地を返上すべきこと

江戸開城

を命じ給ふ。城中の將士かねて薩州の長州と連合せるを恨みたりしが、慶喜が維新大變革の朝議に與らざるに及びて更に之を遺憾とし、今又辭官納土の命あるを聞きて憤慨すること甚だしく、頗る動搖せり。慶喜其の異變を生ぜんことを恐れ、大阪城に退きしが、尙容易に衆心を鎮むる能はず、翌明治元年紀元二千五百二十八年戊辰年正月三日部下の將士に擁せられ、會津・桑名等の兵を先鋒とし、討薩の表を捧げて上京せんとす。薩長等の諸藩乃ち朝命を奉じ、鳥羽・伏見に拒ぎて大いに之を破れり。翌日朝廷嘉彰親王よしかさのちかあき 後の小松宮 彰仁親王を征討大將軍として慶喜を追討せしめ給ふ。慶喜は海路より江戸に遁れ歸れり。朝廷、慶喜征討の部署を定め、熾仁親王有栖川宮を東征大總督とし、西郷隆盛等を參謀とし、列藩の兵を發して、東海・東山・北陸

の三道より進撃せしめ給ふ。然るに慶喜は深く前非を悔い、自ら上野寛永寺に退きて恭順の意を表し、且舊幕府の陸軍總裁たりし勝安芳等をして、隆盛によりて其の罪を謝せしむ。大總督乃ち諸軍に令して進撃を止めしめ、之を朝廷に奏せしかば、四月朝廷慶喜の死を宥して水戸城に幽し、江戸城竝びに軍艦銃砲等を收め、且家臣を廓外に退かしめ給へり。ここに於て我が國は内訌の爲に外國の干涉を受くるの機會を作らず、江戸は兵火の禍を免るるを得たり。舊幕臣の中には、慶喜の恭順を悦ばず、彰義隊を組織して上野に據り、官軍に抵抗するものありしが、直ちに鎮定せられたり。是より先、朝廷は幕府直轄の地約三百萬石を没收し給ひしが、ここに至り、特に一族徳川家達いぶさ田安あをして宗家を繼がしめ、之を

## 奥羽の戦争

靜岡に封じて七十萬石の地を領せしめ給へり。會津の松平氏は二代將軍徳川秀忠より出で、常に幕府の爲に盡すところ多かりき。鳥羽・伏見の役後、藩主容保は歸りて會津の若松城に在り、今回の處置を以て薩長が幼帝を挾みて徳川氏を滅すものなりとし、遂に其の居城に據りて官軍に抗せり。此の時仙臺の伊達氏、盛岡の南部氏、米澤の上杉氏、莊内の酒井氏等東北の諸藩、多く之と連合し、其の勢頗る猖獗なりしも、官軍攻めて之を降し、十月に至りて奥羽地方全く平定せり。

## 函館の戦争

奥羽平定の後も尙舊幕臣の函館に據れるものあり。初め朝廷舊幕府の軍艦を收めんとせし時、其の海軍副總裁榎本武揚艦隊を率ゐて品川灣より遁れ去りしが、奥羽地方の鎮定

するに及び、其の殘兵の之に投ずるあり。舊幕府の歩兵奉行大鳥圭介等も亦來り加り、共に函館の官軍を逐ひて、五稜廓に據れり。其の勢頗る熾なりしも、明治二年五月武揚等遂に官軍に降り、維新の戰亂ここに全く其の局を結べり。

### 第八 内治の整頓

五箇條の御誓文

紀元二千五百二十七年慶應三年十二月九日王政復古の詔を發して大變革を斷行し給ふや、天皇朝に臨みて萬機を親裁し給ひ、翌明治元年三月十四日紫宸殿に御し、公卿諸侯を率ゐて五箇條の國是を神祇に誓ひ、且之を群臣に宣し給へり。其の文に曰く

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マ

サラシメンコトヲ要ス

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

維新政治の基礎ここに始めて確定せり。

此の年八月二十七日天皇紫宸殿に於て即位の大典を擧げ給ひ、九月八日慶應四年を改めて明治元年となし、自今永く一世一元たるべしと詔し給へり。

天皇の即位と一世一元

東京奠都と  
皇后册立

明治元年七月詔して江戸を東京となし、十月車駕東幸して、江戸城を東京城と改め、以て皇居と定め給へり。次いで十二月京都に還幸あり、此の月二十八日左大臣一條忠香ただかの第三女美子はるこを立てて皇后となし給ふ。翌二年三月再び東京に幸し給ひ、是より後、永く此の地に居させ給ふ。

官制改革

是より先、朝廷、總裁議定、參與の三職を置かれしより、施政漸く其の緒につき、明治元年に至りて、立法・司法・行政の三權を分ち、議定三條實美・同岩倉具視・同松平慶永・同島津久光・參與木戸孝允・同大久保利通・同後藤象二郎等をして、其の局に當らしめ給ひき。翌二年七月更に大寶の古制に准じて官制を改めらる。是より後、時時の改定を経て明治十八年に至り、始めて現行の内閣制度の設立を見るに至れり。

版籍奉還

初め朝廷、徳川慶喜討伐の令を發し給ふや、其の領地を收めて朝廷の直轄とし、やがて萬石以下の舊幕臣の知行所約三百萬石をも收め、是等の地を府縣とし、知事を置きて之を治めしめ給へり。されど諸侯の領地は尙舊のままなるを以て、王政復古の名ありて統一政治の實は未だ擧らず。參與木戸孝允・同大久保利通等之を憂へ、各、其の藩主に説くところあり。二年正月薩津島・長毛・土山・肥鍋の四藩主連署して其の封土人民を奉還せんことを奏請せり。是より諸藩も亦相踵いで之に倣ふに至り、此の年六月十七日朝廷遂に其の請を許し、諸藩をして悉く版籍を奉還せしめ、舊藩主を知事に任命して各藩内の政務を執らしめ給へり。此の時八府・二十六縣・二百六十二藩六月二十日現在あり。ここに於て天下の土地人民は

廢藩置縣

皆朝廷に直隸し、政令大小となく一途に出づることとなれり。  
 諸藩既に版籍を奉還し、舊藩主新に知事に任ぜられしより、地方には府藩縣の三治並び置かれ、其の知事はいづれも國家の官吏として、各、其の土地・人民を支配せり。されども諸藩に在りては、因襲の久しき尙領主領民の情實を存するのみならず、國家の要路に立てるものも、藩知事に對しては尙實際に上君臣の關係を有つことあり、且其の管地は往往犬牙錯綜し、或は各所に分散して、施政の不便亦少からざりき。參議木戸孝允・同大久保利通並びに西郷隆盛時に鹿兒島藩大參事たり四年六月參議となる等之を見て一大改革を決行するの必要を悟り、廢藩置縣の爲に盡力するところあり、四年七月に至り、天皇諸藩の知事に

親諭して其の職を罷めしめ、列藩を廢して悉く縣となし、次いで大いに府縣の廢合を行ひ、全國を擧げて三府七十二縣となし給ひき。ここに於て府縣の制始めて整ふ。此の後縣には時時分合廢置あり、二十二年に至りて三府四十三縣となり、以て今日に及べり。

第九 内治の整頓（續き）

琉球の處分

廢藩置縣の後、新に藩を立てたるものあり、琉球是なり。琉球は其の地西南海中に在りて、支那に近く、從來我が監督十分ならざりしかば、時時支那の政府へも朝貢したり。されど此の地は古くより我が國に屬し、殊に紀元二千二百年代の中頃慶長年間より薩州藩の所領たりしこと明白なれば、明治五年

朝廷琉球國王尙泰を封じて琉球藩王となし、之を華族に列し給ふ。其の後十二年に至り、琉球藩を廢して沖繩縣となし、他と同一なる施政の下に置かれたり。

社會及び風俗の改良

武家政治の廢止と共に、社會の階級其の面目を改め、風俗も亦隨ひて變更せり。明治二年版籍奉還の行はるるや、朝廷は公卿諸侯の稱を廢して悉く之を華族とし、次いで諸藩士等を士族とし、翌三年には、從來苗字を有せず或は之を公稱するを得ざりし平民の一般に苗字を稱するを許し、又四年には華族平民の互に婚を通ずること及び華士族の農工商業に従事すること等を許し給へり。士民の散髮脫刀も亦此の年を以て許されしが、帶刀は九年に至りて全く之を禁ぜられたり。又五年に新に文官の大禮服及び通常禮服の制を定

地方の騒亂

められしより、直垂狩衣上下等の從來の禮服は唯祭服の類として存することとなれり。此の年又太陰曆を廢して太陽曆を採用し、其の十二月三日を以て明治六年一月一日とし、六年には舊來の五節句を廢し、祭日・祝日の制を立てられたり。

王政復古の後、政治上・社會上諸般の改革は着着其の歩を進めしが、新舊變遷の激しき時代の常として、政治上意見の相衝突すること多く、時に暴動を企つるものあり。明治六年、參議西郷隆盛・同副島種臣・同後藤象二郎・同板垣退助・同江藤新平等、征韓の議合はずして官を辭するや、江藤新平は翌七年亂を佐賀に起して誅せられ、又九年には熊本・福岡・萩等にも暴動起りしが、いづれも程なく平定せられたり。

西南の役

西郷隆盛は辭職の後郷里鹿兒島に歸り、私學校を設けて子弟を教育したりしが、其の徒黨の中には、當路者の所爲を悦ばずして不平を抱くもの多かりき。會、在京の警吏及び有志の士の歸り來りて動靜を偵察し、脱黨を勧誘するに及び、私學校の徒之を刺客なりと稱するものありて、激昂すること大方ならず、十年二月遂に隆盛を擁して亂を起せり。其の徒四萬餘に達し、勢頗る猖獗なりしが、九月に至りて全く平げられたり。世に之を西南の役と云ふ。此の後内亂全く跡を絶ちて、國民治平の樂を享くるに至れり。

### 第十 外交の進歩

江戸幕府の末に歐米諸國と開港の約を結びし以來、之が是

外交方針の  
確定

非につきて議論一定せず、天下其の方向に迷ふもの多かりき。王政古に復するに及びて、朝廷世界の大勢を察し、二百餘年來の鎖國主義を止め、斷然諸外國と和親するの議を決して之を天下に布告し給ひ、外交の方針ここに始めて確立せり。明治三年には公使を英吉利佛蘭西普魯士及び亞米利加合衆國に遣はして各、其の國に駐劄せしめ、翌年岩倉具視を特命全權大使とし、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文等を副使として、歐米各國を巡察せしむ。此の一行は明治政府の初めの特派使節にして、其の目的は帝國の新事體を列國に紹介し、又見聞を廣くして、新政の參考に資し、條約を改正せんとすること等に在りき。是より後、我が國人は屢、海外諸國を遊歴し、或は彼の地に留學して、其の文物を輸入し、能く彼が

清國との修好と臺灣事件

長を採りて我が短を補ひ、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシとの聖旨は次第に貫徹せらるるに至れり。清國人は江戸時代にも絶えず來りて貿易を營みたりしかども、國際上の交通は當時未だ開けざりき。明治四年に至り欽差全權大臣伊達宗城を清國に遣はして、修好及び通商の條約を締結せしめらる。是れ我が國より外國に向つて條約を締結せる始なり。此の年十一月琉球の民臺灣に漂着して其の生蕃の爲に殺害せられたり。ここに於て我が政府は明治六年特命全權大使副島種臣を清國に遣はし、條約の批准交換を爲すに當り、兼ねて此の事件をも談判せしめしが、清國政府は生蕃を以て化外の民なりとし、且其の地は清國政權の及ばざる所なりとして之に應ぜず。翌七年乃ち臺灣征

朝鮮國との修好

伐の擧あり。然るに清國は俄に態度を變じて蕃地をも其の領土なりと主張し、我が出兵に對して異議を唱へしにより、我が政府は大久保利通を全權辦理大臣として交渉せしむ。清國遂に我が出征の義擧たることを認め、被害民の撫恤金等を辨償して事落着せり。韓半島は我が國と僅に一衣帶水を隔つるのみなれば、其の安危は直ちに帝國の利害に繋り、我が國際事件は太古以來彼我の關係より生ずるもの最も多し。此の半島に國を建てたるもの、古來少からざりしが、其の隣接せる地方には、かはるがはる強國の起るありて、之と相對峙して獨立を保つこと難かりしかば、或は我が國の保護を求め、或は大陸の強國に通じ、以て國家を維持するを常とせり。紀元二千年代の中

頃に至り、李成桂の朝鮮國を建てしより、凡そ五百年の間、其の政府は常に支那の政府に依頼したりしが、亦我が江戸幕府にも通じ、將軍の代替り毎に來聘するを例とせり。されば幕府も亦常に好を朝鮮に通じ、對馬の藩主宗氏をして世世通好の事を掌らしめたり。されども幕末に至りて兩國の交際殆ど絶えしかば、維新の初、我が政府は宗氏をして王政復古の事を朝鮮に告げしめ、且屢使節を遣はして舊好を修めんとせり。然るに朝鮮政府は之に應ぜざるのみならず、我に對して頗る無禮なりしかば、我が國には之を憤るもの多く、參議西郷隆盛・同副島種臣・同後藤象二郎・同板垣退助・同江藤新平等は遂に問罪のことを主張するに至れり。征韓論即ち是なり。會、岩倉大使の一行歸朝し、内治整頓の急務なるを説

北境の經營  
と千島樺太  
の交換

くに及び、征韓の議は遂に行はれざりき。次いで八年九月我が軍艦雲揚艦清國に赴かんとし、途に薪水を朝鮮の江華島に求めしに、其の守兵は不意に之を砲撃せり。政府乃ち黒田清隆を特命全權辨理大臣とし、朝鮮に赴きて其の不法を詰り、兼ねて修好の事を議せしめたり。ここに於て朝鮮政府其の罪を謝して我が要求に従ひ、翌年始めて我と修好條約を締結し、釜山の外元山・仁川の二港をも開けり。是より邦人の彼の地に赴きて在留するもの多く、兩國の關係次第に密接したり。

北海道の地は紀元二千百年代の初頃に松前氏の之を領せしより以來次第に開けたり。されども其の拓殖は主として西南部に止りたりしかば、露西亞人の進みて千島樺太等の

經營に着手するに及び、彼我の境界分明ならざるに至れり。幕府乃ち千島に於てはウルップ島以北を放棄し、樺太に關しては屢、露國に對して國境劃定の談判を試みしが、我は樺太の南半を得んと主張し、彼は全島の領有を欲して、遂に決定に至る能はざりき。王政復古の後、北海道の經營益、其の歩を進むるに及びて、我が政府は更に樺太に於ける境界劃定の議を提出し、明治八年千島のウルップ島以北を我に收め、樺太に對する我が要求を撤回し、北境問題ここに始めて解決することを得たり。

### 第十一 立憲政體の確立

明治元年三月天皇五箇條の國是を神祇に誓ひ給ふや、其の

民選議院設  
立の請願

第一條に「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ」と宣し給ひき。されば政府は公議所後に集議院を開きて制度律令を議せしめ、待詔局を置きて一般人民の意見を徵し、以て着着聖旨に副はんことを力めたり。七年に至り、副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平、由利公正等きみまさは同志のものと共に政治上の團體を組織して之を愛國公黨と唱へ、又民選議院設立のこゝとを建白せり。

然るに政府は漸進の主義を執り、時尙早しとして此の建議を採用せざりしが、翌八年元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置きて審判の權を鞏くし、又地方官會議を開きて民情を通じ、以て立憲政體を立つるの階梯となせり。西南の亂の平ぐに及びては、政府と意見を異にするが爲に干戈に

立憲政體の  
階梯と國會  
開設の大詔

内閣制度の創立

訴ふるが如きこと殆ど跡を絶ちしが、平和の手段によりて其の主張を貫徹せんとするもの漸く起り、十三年に至りては、國會の開設を請願するものも續續として出で來れり。是より新聞雜誌の上にて政治を論議するもの頓に多きを加へ、政黨も亦隨ひて起れり。是より先、政府も亦既に十一年を以て先づ府縣會規則を發布して地方議會を起せしが、十四年には、天皇詔を下し二十三年を期して國會を開設すべきことを宣し給へり。

國會開設のこと決するや、翌十五年政府は其の準備の爲に參議伊藤博文を西洋に遣はして各國の制度を視察せしめ、十八年に至り大いに官制を改革して内閣制度を創立せり。即ち太政大臣、左右大臣、參議等の官を廢して、新に内閣總理

地方自治制の實施

憲法發布と帝國議會の開設

大臣及び外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信の各大臣を置き、相共に内閣を組織して、至尊を輔弼し奉るの任に當らしめたり。宮中には別に内大臣、宮内大臣あり。此の時太政大臣三條實美、内大臣となり、伊藤博文内閣總理大臣兼宮内大臣に任ぜられたり。

次いで二十一年政府は地方共同の利益を發達せしめ國民の幸福を増進せしめんが爲に、隣保團結の舊慣を擴張して、市制、町村制を發布せり。此の法律は翌二十二年より漸次實施せられ、地方自治の制ここに確立せり。

二十二年、天皇紀元節の日を以て國民歡呼の聲の中に憲法發布の大典を擧げ給ひ、同時に皇室典範をも制定して、皇位及び皇族等に關する事項を定め給ひき。翌二十三年十一月

始めて憲法の規定により帝國議會を東京に召集し、天皇親臨して開院の式を舉行し給へり。ここに於て立憲政體の實始めて備れり。

### 第十二 朝鮮の扶植と明治二十七八年戦役

明治十五年  
朝鮮京城の  
變

明治九年我が國が朝鮮と始めて修好條約を締結せしは、他に率先して其の獨立を認めたるが爲なりき。其の後公使花房よしもと義質を京城に駐劄せしめて國交の事に當らしめ、朝鮮亦我が陸軍士官を聘して其の衛兵を訓練せしむるなど、兩國の關係漸次親密に赴けり。然るに十五年京城に於て朝鮮兵の暴動あり、我が公使館は之が爲に焼かれ、我が士官は之が爲に害せられたり。公使乃ち難を避けて長崎に歸り、變を東

明治十七年  
京城の變と  
天津條約

京に急報せり。ここに於て我が政府は朝鮮政府に嚴談して、償金を出し、謝罪使を我が國に遣はし、且我が兵の京城に駐屯するを認むべきこと等を約せしめたり。

朝鮮政府は此の約に従ひ朴泳孝等を謝罪使として我が國に遣はし、我が政府は兵を遣はして公使館を護衛せしめき。當時朝鮮に二黨派あり。一は事大黨にして清國に隸屬せんとし、一は獨立黨にして我が國に頼りて獨立を固くせんとし、互に相争へり。清國は袁世凱等を遣はして兵を京城に駐め、事大黨を助けて其の國事に干涉せしめたり。獨立黨の首領たる金玉均、朴泳孝等は尋常の手段を以て國政を改革するの難きを察し、十七年十二月不意に起りて反對黨の大臣等を宮門に要し之を殺害せり。此の時我が公使は兵を率ゐ

て王宮を護衛したりしに、清國兵來り襲ひ、朝鮮兵も亦之に合して、遂に復我が公使館を焼き、我が士官を殺すに至れり。ここに於て獨立黨の計畫全く破れ、金玉均・朴泳孝等はいづれも我が國に逃れ來れり。翌年朝鮮政府は此の變亂に關して罪を謝し、又我が被害民の爲に賠償金を出すべきこと等を約せり。此の事變たるや、もと清國にも關係するところ多かりしかば、我が國は清國と議して將來の禍根を絶たんとし、特に伊藤博文を特派全權大使として清國に遣はし、李鴻章と天津に會して、兩國各駐韓の兵を撤し、若し必要ありて出兵する場合には、先づ互に通知すべきこと等を約せしめたり。之を天津條約と云ふ。

東學黨の亂  
と日清の開  
戦

斯く朝鮮は、外には日清兩國の間に在りて國情頗る困難な

るが上に、内には國政紊亂し誅求亦甚だしかりしかば、二十七年、東學黨の徒遂に内亂を起せり。其の勢甚だ猖獗にして朝鮮政府自ら之を平ぐる能はざりき。ここに於て清國は屬邦の難を救ふと稱して直ちに兵を朝鮮に送り、天津條約に基づきて之を我が國に通牒せしかば、我が政府も亦在留民保護の爲に出兵せり。斯くて、日清兩國協力して、朝鮮の弊政を改め、禍根を絶ちて永く東洋の平和を保たんことを交渉せしに、清國は之に應ぜざるのみならず、擾亂既に鎮定せりとの故を以て我が兵の撤回を求め、自ら大兵を擁して我を威壓せんとするに至れり。されば我が政府は獨力朝鮮を扶けて其の獨立を固くせんとし、兵を以て王宮を護衛し、公使大鳥圭介をして其の旨を國王に奏せしめたり。此の際清國

は更に大兵を朝鮮に送らんとし、之を運送船に載せて七月二十五日豊島沖に來りしに、會、其の軍艦も亦到り、我が軍艦と遇ひて砲撃を開始す。我が艦乃ち之に應戰して其の運送船を撃沈し、軍艦一隻を撃破し、他の一隻を捕獲せり。日清兩國の戦端ここに開け、天皇宣戰の大詔を下し給ふ。實に明治二十七年八月一日なり。

### 第十三 朝鮮の扶植と明治二十七八年

#### 戦役(續き)

陸海軍の全勝

豊島沖の海戦の後數日を経て、我が陸軍は清兵と成歡に戦ひ、之に勝ちたり。八月二十六日我が國は朝鮮と同盟の條約を結び、九月十五日我が大元帥陛下は大本營を廣島に進め

て親しく軍務を統べ給ふ。此の日恰も陸軍中將野津道貫<sup>みちつら</sup>第一軍の一部を率ゐて、清國兵の據守せる平壤を攻め、戰鬪翌朝に互りて之を陥れたり。次いで我が第一軍は、陸軍大將山縣有朋統率の下に、朝鮮より鴨綠江を渡りて遼東に進入せり。又陸軍大將大山巖は第二軍を率ゐて直ちに金州半島に上陸し、海軍と力を協せて一舉旅順の要塞を陥れたり。又我が艦隊は海軍中將伊東祐亨<sup>いとう かつ</sup>之を率ゐ、九月十七日敵の北洋海軍と黄海に激戦して、其の四隻を沈め、一隻を破壊し、其の他の諸艦にも大損害を與へたり。次いで二十八年二月陸海兩軍力を協せて敵海軍の根據地なる威海衛を陥るるに及び、提督丁汝昌は力竭きて自殺し、北洋海軍の殘艦は遂に我に降り。斯くて我が軍は破竹の勢に乗じて將に北京に逼

らんとし、別に陸軍の一支隊と艦隊の一部とは南に向ひて澎湖島を占領せり。

下關係約

ここに於て清國は戦争を繼續するの不利なるを悟り、李鴻章等を我が國に遣はして和を請はしめしかば、我が政府は内閣總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光を全權辦理大臣となし、李鴻章等と下關に會見せしめたり。斯くて談判の末、清國は遂に明かに朝鮮の獨立を認め、又遼東半島、臺灣及び澎湖島を我に割讓し、銀二億兩<sub>下</sub>を出して我が軍費を賠償すること等を議定し、講和條約を締結せり。時に明治二十八年四月十七日なり。

三國の干涉

兩國交戦の間は、諸外國皆局外中立を守りたりしが、講和の約成るに及び、露獨佛の三國は相提携して我が國が遼東半

島を領有するを以て東洋永遠の平和に害ありとし、之を清國に還付せんことを勸告せり。ここに於て我が政府は内外の情勢に顧みて其の勸告を容れ、清國は其の辨償として銀三千萬兩を我が國に支拂ひたり。

朝鮮の獨立

朝鮮は曩に我が國が其の獨立を認めし後も、尙時に清國に依頼して、其の干涉を脱する能はざりき。然るに今や下關係約成り、清國も十分其の獨立を承認するに至りしを以て、朝鮮國王は深く我が厚誼を謝し、我も亦益、其の獨立の實を擧げしめんことに盡力せり。斯くて三十年<sub>朝鮮開國五百六年</sub>に至り、朝鮮は國號を韓と改め、國王新に皇帝の位に即きて光武と改元せり。

新律綱領と  
改定律例

### 第十四 法典編纂及び條約改正

維新の初諸藩版籍を奉還し、海内の施政一に歸するや、政府は法律を統一するの急を認め、先づ刑律の編成に着手せり。此の時天皇特に詔して、法を定むるは寛恕を旨とせしめ給ふ。明治三年に至りて新律綱領成る。五年更に廣く西洋諸國の法律を參酌して、新律綱領の不備を補ひ、翌年に至り改定律例を頒布す。ここに於て刑法其の體を具ふるに至れり。然れども維新後の政治日に新にして、社會の進歩最も著しく、外國との關係漸次複雑となるが故に、法律も亦周備を期せざるべからず。されば政府は九年に至り刑法、民法、治罪法等の編纂に着手し、成るに隨ひて先づ刑法治罪法を頒布し、

諸法典の完  
成

十五年を以て之を施行せり。是より後、此の刑法は四十一年に新刑法の實施せらるるまで、治罪法は二十三年に刑事訴訟法の實施せらるるまで、並びに存続したり。又民法は特に鄭重なる審議を加へ、三十一年七月を以て愈之を實施せり。現行民法即ち是なり。民法と相前後して、政府は商法の編纂にも着手し、其の一部は早く之を施行せしが、三十二年に至りて愈、其の全部を實施せり。現行商法即ち是なり。此の外、裁判所構成法、民事訴訟法、刑事訴訟法、其の他各種の法律も漸次實施せられ、二十三年より三十一二年の頃に至るまでに、我が法典はほぼ完成せり。而して時勢の進歩は更に刑法の修正を促し、四十一年に至りて新刑法の實施を見たり。ここに於て我が法典完備し、歐米諸國のものに比して毫も遜色

舊條約の不  
完全と其の  
改正の着手

なきに至れり。

法典の編纂は我が明治政府の一大事業にして、嘗に國民をして各、其の堵十三に安んずるを得せしめたるのみならず、條約改正問題の解決にも亦至大なる關係を有したり。抑、舊來の條約には、關稅權の制限、治外法權の規定等、我が國の利益を損し面目を害する條項少からざりき。されば斯かる不完全なる條約を改正して、國際上彼我對等の地位に達せんことは、明治政府の夙に意を注ぎし所にして、明治四年に特命全權大使岩倉具視の一行が歐米諸國を歴訪したるも、其の目的一はここに在りき。其の後、征韓論の爲に參議西郷隆盛以下一同袂を連ねて辭職せしことなどありて、政府の信用未だ諸外國の間に固十四からず、加ふるに征臺の役、佐賀、鹿兒島の

亂等の事變前後相繼ぎ、國內多事なりしにも拘らず、政府は常に銳意條約の改正を企てたり。十五年に至り各條約國の同意を得て條約改正の豫備會議を開き、十九年始めて第一回の本會議を開けり。爾來議を経ること數回なりしが、進行意の如くならず。二十一年に至り、列國會議の法によらず、國別に談判を開き始めて逐次之が調印を見るに至りき。然るに契約の條項中に外人を我が法官として任用する等の事ありしかば、是れ國權を毀損十五するものなりとて、反對の聲朝野の間に沸騰し、改正の事復頓挫せり。されども先年來銳意從事したりし各種法典の編纂は着着として其の功を終へ、二十三年に至りては、其の公布せられたるもの少からず。帝國議會亦始めて此の年を以て開かれ、我が國は東洋唯一の

立憲國となり、我が國情亦漸く彼等の間に了解せらるるに至れり。されば條約改正の談判もここに至りて交渉昔日の如く困難ならず。二十七年日清開戦の頃、英吉利國先づ我が提議に同意し、諸外國亦引續きて之に倣ひ、三十二年七八月の交に至りて愈、新條約を實施せり。ここに於て朝野多年の希望は始めて實現せられ、我が國は關稅權中の一部分を除きては全く歐米諸外國と對等の地位を占むるに至れり。

第十五 明治三十三年清國事變と日英同盟

清國內に於ける諸外國の勢力

明治二十七八年戰役の局を結ぶや、露西亞は講和談判に干渉して遼東半島を還付せしめ、やがて其の報酬として、清國より幾多の特權を得たり。其の中にも西比利亞鐵道に接續

して清國領地内に東清鐵道を敷設するの權を得たるが如きは、最も注目すべきものなりとす。獨逸は又明治三十年に同國の宣教師が清國の暴民に殺害せられたるに當り、突然膠州灣を占領したりしが、翌年遂に清國政府より償金を收め膠州灣を租借し、又此の地方に關する種種の權利をも獲得せり。ここに於て露西亞は更に清國に逼りて旅順、大連及び其の附近一帶の地を租借し、又哈爾賓ハルビンより旅順、大連に至るまで、南滿洲を縦斷して東清鐵道の支線を敷設し、其の附近の鑛山を採掘するの權利を得たり。されば英吉利は東洋に於ける列國權力の平均を失はんことを恐れ、清國と約して、旅順の對岸なる威海衛及び其の附近の地方と、香港の對岸なる九龍半島の領有地に接續せる地域とを租借し、次い

義和團匪の暴擧

で佛蘭西も亦廣州灣を租借せり。かくの如く、西洋諸強國は清國を壓迫して各多大の權利を得又は得んとするに至りしかば、三十一年我が國も亦清國政府に交渉して、臺灣の對岸なる福建省を他に割讓せざるべき旨を約せしめたり。清國政府が是等諸外國の要求を拒絶する能はざるに及び、清國人一部の排外思想は急に増進して、義和團匪の暴動を見るに至れり。三十二年團匪は山東省に蜂起し、保清滅洋の旗を翻して歐米の宣教師を襲ひ、基督教會堂を毀つ等、暴行を逞しうせり。然るに清國政府は之を制止する能はざりしかば、暴徒の勢益、猖獗にして、翌三十三年には、鐵道を破壊し、天津の諸外國人居留地を攻撃し、遂には官兵亦之に投じて北京なる各國の公使館を包圍し、我が公使館員及び獨逸公

列國聯合軍の活動

使を殺害するに至れり。

ここに於て大沽沖に碇泊せる列國軍艦は大沽の砲臺に逼り、我が海軍陸戰隊先登して之を陥れたり。次いで救援の爲に我が國より派遣せる陸軍の到着するに及び、我が軍は列國聯合軍の中堅となりて北京に向ひ、遂に公使館の急を救ふを得たり。此の時、清國皇帝及び西太后は遁れて西安府に向ひしが、やがて清國は列國と談判し、其の巨魁を罰し、償金四億五十萬兩を拂ひ、我が國及び獨逸に謝罪使を遣はすこと等を約して局を結び、世に之を北清事變と云ふ。

露國兵の滿洲占領

義和團匪の起るや、滿洲に在る清國兵之に應じて在留の露國人を襲撃せり。されば露國は此の機に乗じ、兵を滿洲に出して之を占領したりしが、團匪の事、局を結ぶに及びても、尙

日英同盟

兵を撤せず、且韓國をも威壓せんとするの勢を示せり。抑、清、韓兩國の領土を保全し、其の門戸を開放せしむることは我が國と英國と多年其の所見を同じくせる所なりき。然るに東亞の形勢動もすれば此の主義を危くし、延いて東洋平和の維持を困難ならしむべき虞あるにより、三十五年一月を以て我が國は英國と同盟を結び、清、韓兩國の領土を保全し、且他の二國以上連合して東洋に於て同盟國の一と開戦する場合には、他の一は之を援助すべきことを約せり。

### 第十六 明治三十七八年戦役

日露間の交渉

露國は清國に對して滿洲在留の兵を撤去せんと約しながら、期に至りても尙約を果さざるのみならず、却つて益、經營

の歩を進め、又盛に旅順の要塞を修築し、海陸の軍備を増大し、遂には韓國をも威壓するに至れり。滿洲にして一朝露國の有となり、韓國の保全難きに至らんか、直ちに我が國の安危にも影響すべく、東洋の平和は竟に保つべからざるなり。我が政府は乃ち妥協に依りて此の問題を解決せんとし、公平穩和の條件を以て交渉せしが、露國は我が誠意に對し相當の答を爲さず、言を左右にして時日を遷延し、其の間絶えず陸海兩軍を増派し、其の整備するを待ちて我が提議を拒絶せんとする情勢あり。されば我にして尙交渉に時日を費す時は、終には救ふべからざるに至らんとするを以て、政府は已むを得ず國交を斷絶するの旨を露國に通知せり。是れ實に明治三十七年二月六日の事なり。

日露の開戦

國交已に斷絶せり。ここに於て我が聯合艦隊は海軍中將東郷平八郎統率の下に二月九日敵艦を旅順口外に襲撃して大いに之を破れり。此の日聯合艦隊の一支隊も亦陸兵を擁護して韓國に到り、露艦と仁川港外に戦ひて之を破れり。兩國の戦端ここに開け、翌十日を以て、天皇宣戦の大詔を下し給へり。

海軍の戦況

是より後我が聯合艦隊は連續不斷の攻勢を取りて旅順の敵を壓迫し、敵の司令長官海軍中將マカロフを殲し、屢、港口の閉塞を試みて敵の膽を寒からしめ、又陸軍を護送して之を敵地に上陸せしめ、五月二十六日には遂に旅順附近一帯の沿岸の封鎖を宣告せり。次いで八月十日敵艦隊の主力の浦潮斯德艦隊に合せんとして旅順口を脱出するや、我が艦

隊は黃海に邀へ撃ちて大いに之を破りしかば、敵艦散亂して或は中立港に入り、或は樺太に逃れて沈没せしが、大部分は再び旅順に歸還するに至れり。是より先、浦潮斯德なる敵艦隊は我が海軍の虚を窺ひて屢、近海に出没し、我が運送船を砲撃せしかば、沿海の人心頗る動搖せり。然るに八月十四日海軍中將上村彦之丞第二艦隊を率ゐて敵の南下するを蔚山沖に邀へ撃ち、其の一艦を沈め、他艦にも大損害を與へたり。東洋の海上權ここに於て全く我が海軍の掌中に歸したり。

遼東半島の占領

陸軍にありては、陸軍大將黒木爲楨<sup>たかもと</sup>第一軍を率ゐて韓國内に在りし露兵を驅逐し、五月一日鴨綠江に戦ひて、先づ第一戦の勝利を得、進みて敵軍を北方に壓迫せり。次いで第二軍

は陸軍大將奥保鞏<sup>やすかた</sup>之を率ゐて遼東半島に上陸し、五月二十  
 六日南山の敵を撃退して旅順の咽喉を扼せしが、第三軍の  
 來りて旅順の攻圍に任ずるに至り、更に北に轉じて南下せ  
 る敵軍を大いに得利寺附近に破り、進みて遼陽に向ふ。此の  
 時陸軍大將野津道貫は又第四軍を率ゐて進み、同じく遼陽  
 方面に逼れり。

滿洲軍總司令部の設置  
 令陽沙河  
 と遼陽の激戦

斯く戦局の發展するに隨ひ、天皇滿洲軍總司令部を置いて、  
 元帥陸軍大將大山巖を總司令官とし、陸軍大將兒玉源太郎  
 を總參謀長に任じ、滿洲に赴きて陸軍の軍務を督せしめ給  
 ふ。是より我が諸軍は齊しく敵を遼陽方面に壓迫し、八月三  
 十日より激戦六日に亙りて遂に遼陽を占領し、十月更に大  
 いに敵を沙河に破りて、之を北方に潰走せしめたり。

旅順の陥落

乃木希典旅順  
 攻圍開始當時  
 陸軍中將  
 十七年六月三日  
 大將に陞任

旅順要塞の攻圍に任じたる第三軍は陸軍大將乃木希典<sup>のぎまねすけ</sup>之  
 を率ゐ、敵の前進部隊を撃破して旅順の要塞に逼れり。され  
 ども敵が難攻不落と恃める堅城のことなれば、我が軍惡戰  
 苦闘を重ね、以て漸次に其の堅壘を破壊せしが、未だ遽に之  
 を陥るるに至らざりき。然るに此の時敵のバルチック艦隊は  
 本國を發して東航の途に在り、我が海軍は之を邀ふる準備  
 の爲め、永く旅順の封鎖を繼續する能はざるの事情ありき。  
 されば攻圍軍は更に兵力を増し、猛烈なる攻撃を試みて、十  
 一月の末に至り、遂に二百三高地を占領せり。是より我が軍  
 は觀測所を此の高地に設けて、敵の本營及び港内の軍艦を  
 射撃し、殘餘の敵艦隊を全滅し、次いで攻圍軍は更に逼りて  
 有力なる砲臺を陥れ、敵の本防禦線を破りしかば、敵將陸軍

中將ステッセルは遂に城を開きて出て降り。實に明治三十八年一月一日なり。ここに於て上下擧りて相慶し、國民の意氣大いに揚る。

### 第十七 明治三十七八年戰役(續き)及び

#### 戦後の經營

奉天の大戦

旅順要塞の陥落するや、攻圍軍は鋒を轉じて北の方滿洲軍に加り、陸軍大將川村景明かげあき、鴨綠江軍を率ゐて亦之に合し、共に奉天に逼れり。此の時我が兵約四十萬、敵は更に新來の兵を加へて、其の數約六十萬に達し、戦線約三十里の廣きに互れり。敵の總司令官陸軍大將クロバトキンは此の大軍を擁し、必勝を期して奉天を固守せしが、我が諸軍三面合撃して

日本海の決戦

\*東郷平八郎  
明治三十七年六月  
六日將に任

遂に復大いに之を破り、敵を擒にすること數萬の多きに及び。此の役は實に曠古の大戦にして、彼我百萬の軍一野に會し、敵は連敗の恥を此の一舉すすに雪がんとし、最も頑強に抵抗せしが、我が軍勇戦奮闘十四日の久しきに及び、遂に能く此の大捷を得たるなり。三月十日全く奉天を占領し、勝に乘じて敵の殘兵を遠く鐵嶺方面に驅逐せり。捷報到るに及びて國民の元氣益振ふ。  
是より先、露西亞は、三十七年十月バルチック艦隊を出發せしめ、遙かに東洋に向はしめしが、回航頗る遷延し、三十八年五月下旬に至り始めて我が近海に現れたるの報あり。海軍大將東郷平八郎乃ち聯合艦隊を率ゐて之を對馬海峽に邀へ、五月二十七日愈、敵艦の見ゆるに及び、皇國の興廢此の一戦

にあり、各員一層奮勵努力せよとの信號を傳ふ。ここに於て將卒皆勇奮して激戦兩日に互り、遂に大いに之を破る。此の役敵艦の撃沈せられしもの二十隻、捕獲せられしもの五隻に及び、逃るるを得たるものは僅に數隻に過ぎず。敵の艦隊司令長官海軍中將ロゼストウエンスキーは負傷して捕虜となり、之に代れる司令官海軍少將ネボカドフは我に降り。抑、敵の艦隊は殆ど露國海軍の全力を擧げたるものにして、由りて以て東洋に於ける海上權を回復し、戦機を一轉せんと試みたるものなりき。然るに今や我が國は世界海戦史上に空前なる此の大勝利を得しかば、上は天皇の御稜威を頌し、下は將卒の忠勇を讚し、國民歡呼の聲都鄙に溢れたり。此の年七月我が別軍樺太に向ひ、次いで全島を占領せり。

## 樺太の占領

## 平和條約の締結

是より先米國大統領ルーズベルトは日露の交戦久しきに互りて尙未だ止まざるを憂へ、日本海海戦の後、日露兩國の政府に對して講和を勸告せり。兩國政府各、其の忠告を納れ、我が政府は外務大臣小村壽太郎特命全權公使高平小五郎を全權委員とし、露西亞の全權委員ウキッテ・ローゼンの二人と米國のポーツマスに會して談判し、平和條約を締結せしむ。其の重なる條項は露國をして我が國が朝鮮に於て政事上、軍事上、經濟上卓絶なる利益を有することを承認せしめ、樺太の北緯五十度以南を我に割讓せしめ、又旅順、大連及び其の附近一帶の租借權と長春以南の鐵道並びに其の沿道の炭坑等に關する特權とを我に讓與せしむること等となす。九月五日條約の調印成り、兩國の平和ここに舊に復した

樺太及び租  
借地の經營

平和克復の後、我が政府は樺太に政廳を開き、關東州に都督府を設けて、各、其の政務を統べしめ、又旅順口には鎮守府を置きて、其の方面の海防に當らしめたり。次いで又南滿洲鐵道會社の設立ありて、滿洲なる鐵道及び其の沿道の鑛山等を經營することなれり。

韓國の保護

初め日露兩國の戰を交ふるに當り、我が國と韓國とは日韓議定書を交換して利害共通の主義を固くしたり。其の後二回の協約を重ねて韓國を我が保護國とし、其の帝室の安全を保障し、其の外交權を收め、やがて統監府を置きて事に當らしめたり。四十年七月、韓國皇帝位を皇太子に讓るに及び、更に日韓協約を擴張し、韓國政府は施政の改善に關して統

清國領土の  
保全

監の指導を受くべきこと、及び邦人を韓國官吏に採用すべきこと等を定めて、益、保護の實を擧ぐることとせり。十月天皇、皇太子をして親しく韓廷を訪ひて親交を重ねしめ給ひ、次いで韓廷は其の皇太子を我が皇室に託して東京に留學せしむるに至り、兩國の關係益、親密となれり。

日露の戰終りて後、我が國は戰時中占領したりし滿洲の地を清國に還付し、露西亞も亦約に従ひて撤兵せり。ここに於て清國は自ら其の政令を滿洲に布くに至り、北清事變以來の難問題は全く解決せられて、清國領土を保全するの目的はここに始めて達せられ、日清兩國の關係も隨つて益、親善を加へたり。

日英同盟の

三十八年日露の平和將に克復せんとするに當り、日英兩國

擴張と日佛  
日露の協約

は時勢に鑑みて更に其の同盟條約を擴張し、兩國攻守相援くべきことを約せり。次いで四十年我が國は佛蘭西・露西亞の二國と協約を結び、又翌年亞米利加合衆國とも外交文書を交換して、それぞれ親交を重ね、永く東洋の現狀を維持すべきことを期せり。

### 第十八 人文の發達と軍備の整頓

西洋文物の  
輸入と國粹  
の保存

王政復古の後、政府は舊來の陋習を廢して我が國固有の美風を復興するに力めたりしが、又世界の太勢に鑑み、諸外國と和親するの方針を執りしより、銳意西洋の文明を導きたり。之が爲に一時は西洋の事物を模倣すること度に過ぐるの嫌なきにあらざりしが、國粹保存の論起りて、能く其の調

教育

和を得、我が長所は益之を發揮し、彼の勝れる所は躊躇せず之を採用せり。されば人文は日に就り月に將みて、教育・實業等萬般の事項頗る其の面目を改めたり。教育は明治五年に學制の頒布ありしより、國民教育次第に普及して、今や邑に不學の戸なく、家に不學の人なきの盛況を呈し、高等普通教育等も亦益、進歩せり。又専門の教育には、帝國大學を始として、官公私立の各種専門學校相踵いで起り、其の設備も漸次整頓するに至れり。明治二十三年十月三十日天皇教育に關する勅語を下し給ふ。此の勅語は十五年に軍人に下し給ひし勅諭及び四十一年の戊申詔書と共に國民の常に最も服膺すべきものなりとす。教育の普及と共に農・工・商業次第に進歩し、海に陸に運輸交

實業慈善事

業等の進歩  
及び萬國同  
盟加入

通の機關亦發達して、國民の之が爲に利便を増すこと甚だ多し。又博愛慈善に關する團體相次いで起り、不幸なる同胞の之によりて慰安救濟せらるるもの少からず。中にも赤十字社は、もと西南の役に際して起りたりし博愛社の發達せしものにして、其の事業最も觀るべし。十九年に我が政府が萬國赤十字條約に加盟するに及び、社名を日本赤十字社と改めしが、日清日露の兩戰役の際に、我が傷病兵の之が救護を受けたるは固より、敵の傷病兵にありても之が恩惠に浴したるもの甚だ多かりき。此の赤十字同盟の外にも、我が政府は學術其の他諸般の事に關して萬國の同盟に加入すること多く、世界一般の進歩に後れず、東西共通の利益を増大することを力めたり。

國防

人文かくの如く發達すると共に、是等諸外國と伍を同じくして對等の地位を保たんには、國防の事亦益、整頓を要す。明治六年に徵兵令實施せられ、海内皆兵の制行はれしより以來、國家の進運と世界の情態とに鑑みて、軍備は漸次に擴張せられたり。二十五六年の頃まで、僅に七箇師團の陸兵と約六萬噸の軍艦とあるに過ぎざりし我が陸海軍は、日清日露の兩戰役を経て、今や陸には十九箇師團の設あり、海には五十餘萬噸の艦艇を有するに至り、要塞軍港等亦いづれも整頓じたり。斯く國防の事漸く備り、内人文の發達と相俟ちて、外能く其の侮を禦ぎ、以て東洋の平和を保障し得るに至れり。

建國より王  
政復古に至  
る概説

### 第十九 總括

神代は遼遠なり。されども天祖天照大神が皇孫に此の國土を授け給ひて、寶祚の天壤無窮ならんことを勅し給ひしは炳として日星の如し。顧みれば神武天皇が此の神勅の御趣意を遵奉して大和地方を平定し、始めて皇位に即き給ひしは、今より二千五百餘年の昔に在り。其の後列聖相承けて國利民福を増進せんことを圖り給ひ、億兆均しく其の德澤を被れり。然れども時久しうして變自ら生じ、權臣蘇我氏專横を極め皇威漸く輕からんとす。ここに於て藤原鎌足慨然として之を救はんとするの志を懷き、中大兄皇子を輔けて遂に大化の改新を成就し、大いに皇威を振興せしめ奉れり。改

新の要點は從來豪族等の私有したりし土地人民を朝廷に收むるにありて、其の跡明治維新後の版籍奉還の事と甚だ相似たり。是より後、藤原氏次第に隆盛に赴き、奈良朝を經、平安朝の中頃となりては、遂に政權を擅にするに至り、皇威復漸く衰へ、地方の政治隨ひて紊れ、以て天下の禍亂を致せり。源頼朝武門より起りて海内を平定し、幕府を鎌倉に開くに至り、萬民其の堵に安んずるを得たりしが、幕府擅權の端亦ここに發し、是より天皇虚器を擁し給ふこと約七百年の久しきに及べり。其の間武家政治にも亦興廢ありて、一たびは王政の古に復せしこともありき。建武中興是なり。室町時代の中葉以後となりては、幕府の威權も漸く衰へ、天下麻の如くに亂れて、皇室亦更に衰微の極に達せり。織田信長・豊臣秀

吉相踵いで出でて擾亂を平定するに及び、秩序大いに回復せられ、次いで徳川家康其の後を承けて江戸幕府を開き、以て二百六十餘年間の太平を致すを得たり。然れども政權尙依然として武將の手に在りて、天皇の大權は殆ど行はれざりき。然るに國史の研究起り、國民漸く我が皇室の尊嚴にして國體の優秀なることを知るに及び、尊王の大義を論ずるもの次第に多く、武家政治の非を鳴らすの聲は當時の施政を難ずるの聲と相和し、遂に王政復古の大業を興起せしむるに至れり。

## 明治維新

明治の維新は實に未曾有の一大變革なり。武家政治は王政の衰ふると共に徐徐に起りしものなれども、王政復古は之に比すれば寧ろ短時期の間に行はれたり。之が爲に生命を

犠牲に供したるもの固より甚だ多かりき。而も此の變革の性質の重大なるに比ぶれば、又寧ろ流血の慘を見ること少かりしと謂ふべし。其の後、尙朝旨を誤解せる者ありて、爲に一時奥羽地方に兵亂の不幸を見しが、其の禍甚だしからずして鎮定し、當時の敵味方は相携へて力を國家に盡し、祖先以來の世襲したりし土地、人民を奉還し、廢藩置縣の大事も引續きて容易に行はれたり。かくの如きは畢竟一視同仁の聖徳の下に、天下の人各、其の私情を棄てて一意報國の大義を重んじたる結果にして、古今東西の歴史上に、未だ嘗て其の類例を見ざるの盛事なりとす。

韓半島は其の地我が國に近接して唇齒輔車の關係あり。然るに數十年來韓國の政治紊亂して、内に暴民の屢、蜂起する

日清日露の  
兩役

あり、外に清露兩國の壓迫を加ふるありて、半島の形勢動搖極まりなく、將來の國運豫知し難きものありき。半島にして亂れんか、若しくは他の強國の有とならんか、其の禍忽ち我が國に波及して、東洋の平和亦希求すべからず。是れ實に日清日露二大戦役の已むべからざりし所以にして、又我が國が永遠の平和の爲に一時多大の犠牲を吝まざりし所以なりとす。

## 國民の覺悟

かくの如くにして、我が國は實に空前の榮譽ある地位に到達したり。是れ勿論聖徳の宏大なるに由ると雖も、亦臣民相共に國家の大義を覺悟し、堅忍不拔一定の目的に向つて進みたる結果なりとす。殊に近く日露戦役に際しては、我が將卒各、忠勇の精神を發揮し、國民一致之が後援に力め、遂に能

く彼の強大を以て歐洲列國に畏怖せられたる敵軍を到る處に撃破し、異彩ある國史の成跡をして更に一層の光輝を増さしめたり。然れども前途は尙遠く國民の責任は更に其の重きを加へたり。されば將來の國民たるものは能く是等成功の事情を明かにして、愈、其の智徳を増進し、各自其の本分を守りて、益、國家の富強を圖り、以て更に大いに帝國の勢威を世界に輝かし、列聖海嶽の洪恩に報い奉らんことを期せざるべからず。

### 小學日本歷史

新制高等小學校  
第三學年 用終

## 附錄

### 年表

(注意)

明治五年以前は總べて太陰曆により明治六年以後は太陽曆に従ふ隨つて紀元二千五百三十二年以前は太陰曆正月元日より十二月晦日までを以て紀元の年に當つるものとす

紀元	御宇	年月日	摘要
一九五	後宇多天皇	建治元年	伊太利人マルコ・ポーロ元に来る <small>西曆一 二七五</small>
二〇六	後村上 後光嚴 後龜山 天皇	正平二 元 三年	明の太祖即位す
二〇五	後小松 天皇	應永三 年	李成桂朝鮮國を建つ
二〇六	後小松 天皇	應永八 年	足利義滿使を明に遣はす <small>爾後屢明 と交通す</small>
二五三	後土御門 天皇	明應元 年	伊太利人コロンブス西航して西印度諸島に達す、亞米利加洲發見 <small>西曆一 四九二</small>
二五五	同	同	葡萄牙人バスコ、ダ、ガマ印度への航路を開く <small>西曆一 四九八</small>
二五九	後奈良 天皇	天文十二 年八月二十五日	葡萄牙の商船種子島に来る
三〇九	同	同	宣教師西班牙人フランソア、ザビエー鹿兒島に来る
三二八	正親町 天皇	永祿元 年	露西亞、西比利亞の經略に着手す <small>西曆一 五五八</small>
三三五	同	同	西班牙人フィリピン群島を取る <small>西曆一 五六五</small>

三三六	正親町天皇	永祿十一年九月二十六日	織田信長、足利義昭を奉じて京都に入る <small>是より後信長漸次近畿地方を平定す</small>
三三四	同	天正十年六月二日	明智光秀、織田信長を弑す
同	同	同	大友有馬、大村の三家使節を羅馬法王の許に遣はす
三三〇	後陽成天皇	同 十八年七月六日	北條氏滅ぶ、是に至つて全國平定す
三三五	同	文祿元年三月一日	朝鮮征伐の軍京都を發す
三三六	同	慶長三年八月十八日	豊臣秀吉薨す、次いで朝鮮の役罷む
三三〇	同	同 五年九月十五日	關原の戰
三三三	同	同 八年二月十二日	徳川家康征夷大將軍に任ぜらる
三三五	同	同 十年三月四日	朝鮮の使者來りて家康に伏見に見ゆ、是に至つて朝鮮との交通再び開く
同	同	同 四月十六日	徳川家康退隱し子秀忠征夷大將軍に任ぜらる
三三九	同	同 十四年四月三日	島津家久琉球を伐ち國王尙寧を生擒す
同	同	同 七月二十五日	和蘭人に通商を許す
三三七	後水尾天皇	同 十七年三月十一日	切支丹宗の禁令を嚴にす
三三七	同	同 十八年八月二十八日	英吉利人に通商を許す
同	同	同 九月十五日	伊達政宗其の臣支倉六右衛門等を羅馬に遣はす
同	同	同 十二月十九日	再び切支丹宗の禁令を嚴にす
三七六	同	元和二年四月十七日	徳川家康薨す

同	同	同	愛親覺羅奴爾哈赤皇帝の位に即く <small>清の太祖</small>
二八三	同	同 九年七月二十七日	徳川秀忠退隱し子家光征夷大將軍に任ぜらる
二九二	明正天皇	寛永九年正月二十四日	徳川秀忠薨す
二九三	同	同 十年二月二十八日	重ねて切支丹宗嚴禁の令を發す <small>是より後數回禁令を重ぬ</small>
二九七	同	同 十四年十月二十五日	島原の亂起る、明年二月二十八日に至りて平ぐ
三〇三	後光明天皇	同 二 十 年	露西亞國の探檢隊黒龍江の上流に達す
三〇四	同	正 保 元 年	清都を奉天より北京に遷す <small>此の後僅に其の許を保つこと二十年</small>
三二二	同	慶安四年四月二十日	徳川家光薨す、七月二十六日子家綱征夷大將軍に任ぜらる
三二七	後西院天皇	明 曆 三 年	徳川光圀大日本史の編纂に着手す
三三〇	靈元天皇	延寶八年五月八日	徳川家綱薨す、七月十八日弟綱吉征夷大將軍に任ぜらる
三三七	東山天皇	寶 永 四 年	露西亞國の經略勘察加半島に及ぶ
三三九	同	同 六年正月十日	徳川綱吉薨す、四月二日姪家宣征夷大將軍に任ぜらる
三三七	中御門天皇	正徳二年十月十四日	徳川家宣薨す、翌年三月四日子家繼征夷大將軍に任ぜらる
三三七	同	享保元年四月三十日	徳川家繼薨す、一族吉宗紀伊より入りて宗家をつぎ七月十八日征夷大將軍に任ぜらる
三四〇	櫻町天皇	延享二年九月一日	徳川吉宗退隱し十月七日子家重征夷大將軍に任ぜらる
三四五	同	寶曆元年六月二十日	徳川吉宗薨す
三四二	桃園天皇	同 八年七月二十四日	竹内式部尊王論を唱へ罪せらる
三四八	同	同	

二四三〇	桃園天皇	寶曆十年五月十三日	德川家重退隱し七月二日子家治征夷大將軍に任ぜらる
二四三二	同	同十一年六月十二日	德川家重薨す
二四三六	後桃園天皇	安永七年	露西亞人國後島に来る
二四四六	光格天皇	天明六年九月八日	德川家治薨す、一族家齊(一橋家)宗家をつぎ翌年三月六日 征夷大將軍に任ぜらる
二四四七	同	同七年六月十九日	松平定信老中となる
二四六八	同	文化五年八月十五日	英吉利船長崎に來りて亂暴す
二四八五	仁孝天皇	文政八年二月十八日	外國船擊攘の令を發す
二四九四	同	天保五年三月一日	水野忠邦老中となる
二四九七	同	同八年四月二日	德川家齊退隱し八月五日子家慶征夷大將軍に任ぜらる
二四九八	同	同十年十二月十八日	高野長英等罪せらる
二五〇一	同	同十二年閏正月三十日	德川家齊薨す
二五〇二	同	同十三年七月二十三日	外國船擊攘の令を緩む
二五〇六	孝明天皇	弘化三年二月十三日	孝明天皇踐祚 <small>翌年九月二十三日即位</small>
二五二二	同	嘉永五年九月二十二日	今上天皇降誕 <small>太陽曆推歩十一月三日</small>
二五二三	同	同六年六月三日	亞米利加合衆國の使節ペルリ浦賀に来る
同	同	同七月十七日	露西亞國の使節プーチャチン長崎に来る
同	同	同二十一日	德川家慶薨す、十月二十三日子家定征夷大將軍に任ぜらる

二五二四	同	同	安政元年正月	亞米利加合衆國の使節ペルリ再び浦賀に来る
同	同	同	同三月三日	亞米利加合衆國と和親條約を結び下田・函館にて薪水食糧を給することを約す
同	同	同	同十月十五日	露西亞國の使節プーチャチン下田に来る
三五二六	同	同	同三年七月二十一日	亞米利加合衆國の總領事ハルリス下田に来る
三五二七	同	同	同四年十月二十一日	亞米利加合衆國の總領事ハルリス將軍に謁見す
同	同	同	同十二月十二日	亞米利加合衆國と通商條約の議を始む
三五二八	同	同	同五年正月二十二日	老中堀田正睦上京して條約の勅許を請ふ
同	同	同	同四月二十三日	井伊直弼大老となる
同	同	同	同六月十九日	亞米利加合衆國との條約に調印す
同	同	同	同二十五日	紀州藩主徳川慶福 <small>後家茂と改む</small> を將軍の繼嗣とす
同	同	同	同二十八日	勅して三家大老の中に上京を命ず
同	同	同	同七月五日	徳川慶勝・徳川齊昭・松平慶永等を罰す
同	同	同	同十日	和蘭との條約に調印す
同	同	同	同十一日	露西亞との條約に調印す
同	同	同	同十八日	英吉利との條約に調印す
同	同	同	同八月八日	徳川家定薨す、十月二十五日家茂征夷大將軍に任ぜらる
同	同	同	同九月三日	佛蘭西との條約に調印す



三五六 今上天皇

同 同

明治元年正月四日  
同 十日  
同 二月九日  
同 三月九日  
同 十四日  
同 四月四日  
同 五月二十四日  
同 七月十七日  
同 八月二十七日  
同 九月八日  
同 二十二日  
同 十月十三日  
同 十二月二十二日  
同 二十八日  
同 二年正月十日  
同 二十三日  
同 三月十二日

嘉彰親王征討大將軍に任ぜらる  
舊幕府直轄の地を收む  
熾仁親王東征大總督に任ぜらる  
慶喜西郷隆盛によりて罪を朝廷に謝す  
天皇五箇條の御誓文を宣し給ふ  
慶喜死を宥されて水戸城に幽せらる  
公議所後集議院と改むを設く、十二月六日東京に移す  
江戸を改めて東京とす  
今上天皇即位太陽曆推歩十月十二日  
元を明治と改め一世一元の制を定む  
松平容保降り翌十月奥羽全く平ぐ  
天皇東京に幸し給ふ九月二十日京都御發聲江戸城を改めて東京城とす  
天皇京都に還幸し給ふ八月八日東京御發聲  
皇后册立  
獨逸北部聯邦と修好通商條約を締結す  
薩長・土肥四藩主連署して版籍奉還を請ふ  
待詔局を設く

同 同 同 同 同 同 同 三五三 同 同 三五〇 同

同 同

同 二十八日  
同 五月十八日  
同 六月十七日  
同 七月八日  
同 十二月二十五日  
同 三年九月十九日  
同 閏十月二日  
同 十二月二十日  
同 四年正月二十四日  
同 四月二十七日  
同 七月十四日  
同 八月九日  
同 二十三日  
同 十月八日  
同 十一月二十二日  
同 月

天皇再び東京に幸し給ふ七日京都御發聲是より永く東京に居させ給ふ  
榎本武揚等降り維新の戦亂終結す  
天皇版籍の奉還を許し給ふ、公卿諸侯の稱を廢して華族とす  
大寶令に準じて官制を改革す  
始めて東京・横濱間に電信を通じ後十二年一月に至りて萬國電信條約に加盟す  
平民の一般に苗字を稱するを許す  
少辨務使公を英吉利・佛蘭西・普魯士三國に駐劄せしむ、翌日少辨務使公を米國に駐劄せしむ  
新律綱領を頒つ  
始めて郵便制を東京・京都及び大阪の間に實施し後十年三月三日に至りて萬國郵便聯合條約に加盟す  
欽差全權大臣伊達宗城を清國に遣はして修好條約を結ばしむ  
廢藩置縣  
散髮・脫刀を許す  
華族平民の互に婚嫁を通ずるを許す  
特命全權大使岩倉具視等を歐米諸國に遣はす  
府縣を廢合して三府七十二縣とす  
琉球の民臺灣に漂着して生蕃の爲に殘害せらる

三五三	今上天皇	明治四年十二月十八日	華士族の農工商業を營むを許す
三五三	同	同五年八月三日	學制を頒布す
同	同	同 九月十二日	天皇親臨して東京横濱間の鐵道開通の式を擧げさせ給ふ
同	同	同 十四日	琉球國を藩とし國王尙泰を封じて藩王となし華族に列す
同	同	同 十一月九日	曆制の改定 <small>從來の大陰曆を廢して明年一月一日より太陽曆を行ふこと</small>
同	同	同 十二日	禮服の制を定む
三五三	同	同六年一月一日	太陽曆實施 <small>太陰曆明治五年十二月三日</small>
同	同	同 二月二十七日	特命全權大使副島種臣を清國に遣はす
同	同	同 六月十三日	改定律例を頒ち七月十日より施行す
同	同	同 九月十三日	岩倉大使の一行歸朝す
同	同	同 十月二十四日	征韓の議合はず西郷隆盛參議を辭す翌日副島種臣後藤象二郎板垣退助江藤新平亦參議を辭す
三五四	同	同七年一月十八日	副島後藤板垣江藤等民選議院設立のことを建白す
同	同	同 二月一日	佐賀の亂起る
同	同	同 四月四日	陸軍中將西郷從道をして臺灣の生蕃を征伐せしむ
三五五	同	同八年四月十四日	元老院及び大審院を設く
同	同	同 五月七日	千島樺太交換の約成る
同	同	同 六月二十日	地方官會議を召集す

同	同	同 九月二十日	朝鮮江華島事件 <small>軍艦雲揚艦砲撃せらる</small>
三五六	同	同九年二月二十六日	朝鮮との修好條約成る
三五七	同	同 三月二十八日	士民の帶刀を禁ず
同	同	同十年二月十五日	西南の役起る、九月二十四日に至りて平く
三五八	同	同十一年七月二十五日	亞米利加合衆國と關稅に關する改正條約成る
三五九	同	同十二年三月二十日	始めて府縣會を開く
同	同	同 四月四日	琉球藩を廢して沖繩縣を置く
同	同	同 八月三十一日	嘉仁親王御誕生
三五四〇	同	同十三年七月十七日	刑法治罪法を公布し十五年一月一日より施行す
三五四一	同	同十四年十月十二日	詔して明治二十三年國會開設のことを告げ給ふ
三五四二	同	同十五年七月二十三日	朝鮮の暴徒我が公使館を燒く
同	同	同 八月三十日	朝鮮との講和條約成る
三五四四	同	同十七年十二月四日	清國兵朝鮮兵と共に我が公使館を襲ふ
三五四五	同	同十八年一月九日	朝鮮との講和條約成る
同	同	同 四月十八日	天津條約成る
同	同	同 十二月二十二日	内閣制度創立
三五四六	同	同十九年四月十六日	メートル條約に加盟の件公布





明治四十二年六月十四日印刷  
明治四十二年六月十七日發行  
明治四十三年八月二十日翻刻印刷  
明治四十三年八月三十日翻刻發行

著作權所有

明治四十四年八月廿五日  
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町拾六番地  
株式會社 國定教科書共同販賣所

著作兼  
發行者

文部省

發行  
者刻

東京市日本橋區新右衛門町拾七番地  
日本書籍株式會社

印刷  
者

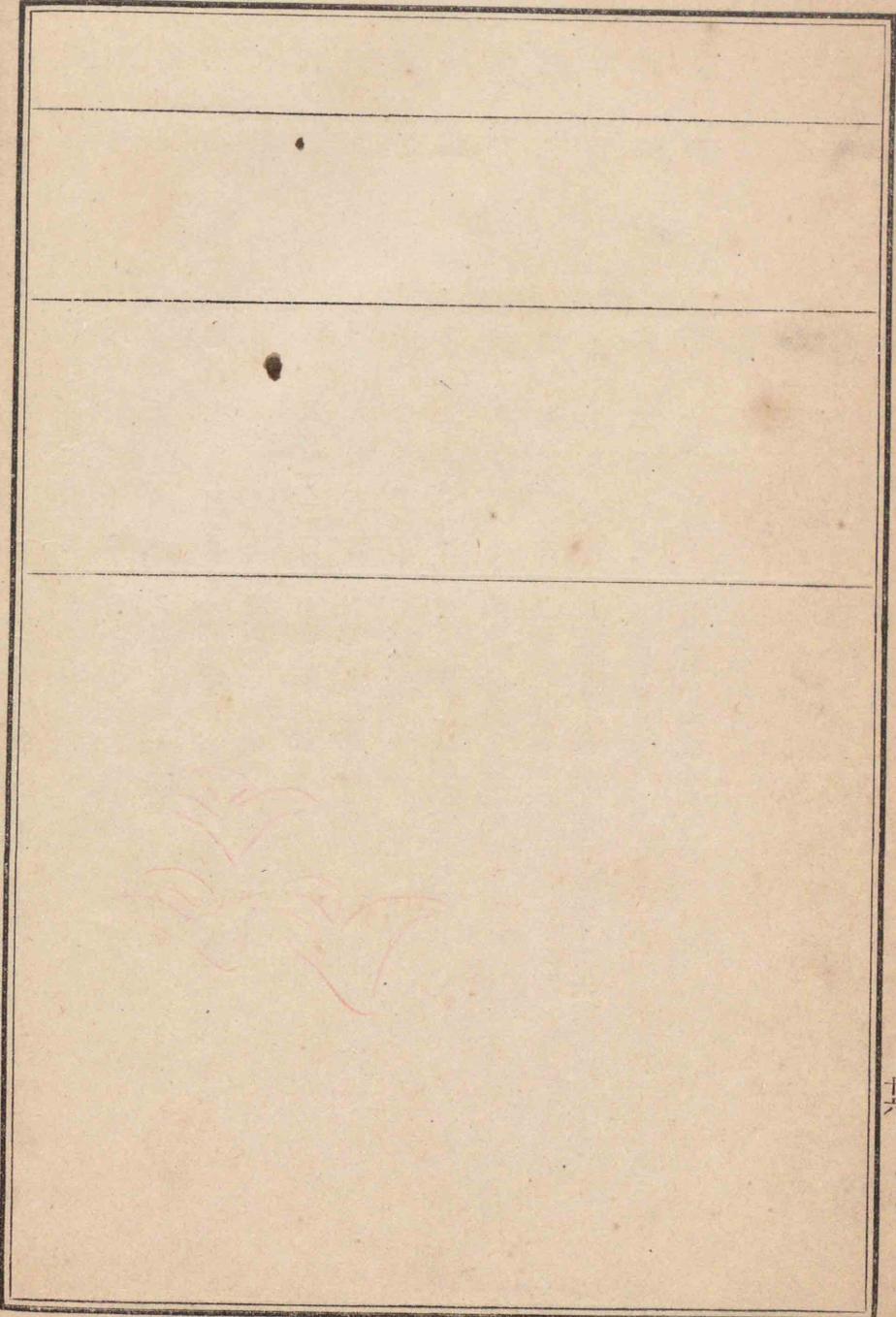
東京市神田區裏神保町壹番地  
龜井忠一

印刷  
所

東京市神田區三崎河岸拾二號地  
三省堂印刷部

小學日本歷史新制第三學年用

定價金拾錢



文庫

10

532

広島大学図書

2500030532

